

刷毛



「刷毛王国」——名古屋市の北にある愛知県甚目寺町は、かつてこう呼ばれた。全国有数の刷毛の生産地だ。

1915(大正4)年に、故山崎政三郎、つた夫妻が刷毛作りの本拠地、大阪に住み込みで3年間修業し、製法を学んで戻り、後進の育成に励んだ。終戦後、農家の余った労働力を利用する形で広がった。やがて夫妻から製造と販売手法を学び、独立する職人が増



毛質・木柄厳選 塗装に差

え、産地が形づくられた。家畜として、馬やヤギを飼っている農家も多く、材料が調達しやすかったことも発展を支えた。

町内の刷毛の製造業者数は、1965年に大阪の50社、東京の30社を引き離して、同町だけで100社を超えた。生産額も全国の3割を占め、70年に全国一の生産量となった。現在40社ほどに減ったが、05年には年間約620万本を生産し、大阪、東京で業者数が減った分、同町の国内シェアは高まり6割を誇るといふ。

55年に創業した吉川刷毛製作所の跡を受け継ぐ「アチーヴ」の工房。作業場では音一つしない。細い動物の毛を扱うため、息を吹きかけただけで毛が飛び散ってしまう。マスク姿の職人もいる。工房内では、アチーヴ社長の吉川修司さん(45)の父、故郷一さんの代からの古い機械が使われている。

ベルトコンベヤーのような機械を使い、ヤギ、馬、豚の3種類の毛を重ね合わせ、混ぜる。それを大型のアイロンでプレスして、毛のくせを伸ばして束にまとめ、毛の流れを一定方向にそろえる。今でも刃研ぎを使って重さを量り、1束ずつ丁寧に紙に巻いて束状にして、専用のミシンで毛の束を縫い

付ける。塗装用はステンレスの針金、調理用は生糸を使う。最後にほこりや毛羽を取り除いて完成する。完全には機械化されておらず、熟練の手作業が物を言う。刷毛は建築塗装用のほか調理用まであり、価格は800円から9千円ほど。幅が広くなるほど価格は高くなる。

今は廉価な中国からの輸入品が多くなったが、「アチーヴ」の刷毛でペンキを塗ると、塗った面がムラなく仕上がる」と職人から評価されている。

同社では、毛の弾力性や長さなどを変えた何百種類をそろえ、使い手に合うものを選ぶようにしている。木柄は岐阜県中津川市産のヒノキにこだわる。「握る感触もいい」と注文は全国各地の塗装職人や防水職人から舞い込んでくる。国産の刷毛には輸入品にはない昔ながらの良さがある。「吹きつけやローラーより、刷毛で塗った方が厚く塗れるから、外壁や内壁が長持ちします。これも刷毛の効用」と吉川さん。

甚目寺町は22日、隣接する町と合併して「あま市」になる。「甚目寺の地名は消えても、刷毛作りの伝統までは消したくありません」(山口恵理子)



今回の工程表

刷毛

- 1 原料になる毛の束。右が馬、左がヤギの毛
- 2 馬、ヤギなど複数の毛を混ぜてから毛先を整える
- 3 刷毛1本分の分量に毛を分け、紙で巻く
- 4 紙で巻いた毛の束を木の柄に挟む
- 5 木の柄に穴を開け、針金などでミシン縫いで完成



The Asahi Shimbun



動画は、刷毛を作る工程です。24日まで配信。「iPhone」は、<http://asahi-nagoya.com/iph>から見られます。

メモ 刷毛が広く作られるようになったのは、江戸時代末期。ペリーが黒船で来航し、西洋からペンキがもたらされたことがきっかけだといふ。

縄文時代や古墳時代の出土品の中に赤色の顔料ベンガラがあったため、その時代から刷毛の原型があったのではないかとされている。現在は動物の毛が主流だが、飛鳥時代の遺跡からは麻やシュロなど植物繊維から作られた刷毛が出土している。弾力性、耐久性が優れているため、動物の毛に変わった。

「アチーヴ」で作られた刷毛は「はけ屋」で販売中。電話番号は(0120・39・8983)。ホームページ(<http://www.hakeya.com/>)から購入することもできる。

記者から 刷毛には、障子やふすまを張る幅が広い「のり刷毛」、工場ラインの機械のほこりなどを払う「払い刷毛」、医療用など用途が幅広く、機械だけでは生産できない。中国製が多く出ているが、良質な製品をいつまでも生産し続けてほしい。

読者から □「つくる」の「ガラ紡」の記事。以前、ガラ紡に関係した者にはうれしいことです。小生の曾祖父・六三郎は臥雲翁の信州の地まで直接教えを受けに出かけたと聞いています。1907年ごろ、愛知県の岡崎市を流れる乙川をせき止めて水路を造り、水車を回してガラ紡機10セット以上を十数人の従業員とともに動かす始まりました。

(愛知県岡崎市 男性)
□岡崎市の官舎に住んだ10、11歳ごろ、大きな屋敷のお嬢様の部屋へ遊びに行くといつも、シャシャと軽やかな音がやむことなく聞こえていた。あの付近に行ってみたくと思った。
(愛知県小牧市 68歳女性)

「つくる」は今月で終わります

◆記事のご感想、ご意見をお待ちしています。掲載者に図書カードを進呈します。はがきに住所、氏名、年齢をお書きのうえ、〒450・8691 郵便事業会社名古屋支店私書箱301号、朝日新聞元氣編集部「つくる係」までお送り下さい。

作・造・創